

POINT |
態度

自分事として捉えることを意識した言語活動の工夫

1 言語活動の意義

言語活動を行う上で重視したいことはコミュニケーションを行う目的、場面、状況（条件）などを明確に設定することである。教科書に提示されている題材が子どもの実態、既習事項や表現に合っているかなどについて、振り返りシートなどを活用して日常的に把握することが大切ではないだろうか。

特に言語活動は、教科書の決められた表現を使った単なる反復練習のようなやり取りだけでなく、教科書を活用して子どもにとって身近な場面を設定し、必然性のある場面でコミュニケーションの面白さや楽しさを体験させることが大切だと考えられる。

2 必然性のある場面設定

例えば、以下のようにしてみてもどうだろう。

「レストランのオリジナルメニューを使ってロールプレイをしよう」

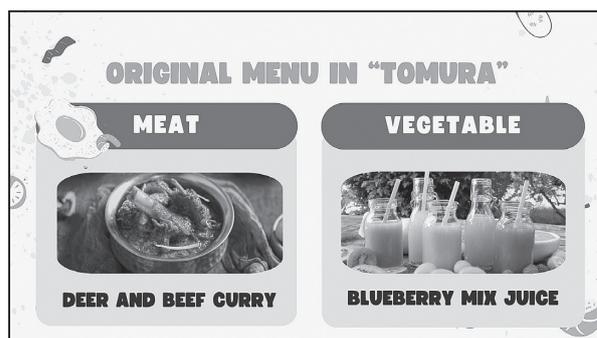


「地域にあるレストランであなた考案のメニューが発売されます。海外から来た観光客にあなたが店員となって、商品を紹介したり注文を取りに行ったりしましょう」

こうすることで、「相手意識」や「目的意識」が生まれ主体的に取り組むきっかけにはならないだろうか。

実際に授業を行った際には、これだけでは活動を自分事として捉えられない子どもの姿が見

られた。そこで、さらに地域ならではの食材や地域の特色を生かしたメニューについて考えるよう条件を追加し日常生活と関連付けた。それでも、子どもの思考が教師の予想通りに働かないことはよくあることだろう。活動にゆとりを持たせ、そこに追加の設定を加えたり、ちょっとしたヒントを与えたりすることも効果的である。



【子どもが考案したオリジナルメニュー】

3 自分事として捉える力への工夫

題材にちょっとしたアレンジを加えることで、子どもたちは活動を自分事として捉えるようになるだろう。そこに必然性が生まれることで、周りにある題材から子どもたち自身が表現したいことを柔軟に選択することができるようになるだろう。与えられた場面や条件に応じて、目的をもって適切な語句を選択したり、題材についての対話を行ったりすることが言語活動の充実につながると考える。

言語活動を行う目的、場面、状況を工夫することで、子どもが本当に伝えたい気持ちや考えを試行錯誤するようになり、より一層実際のコミュニケーションに近いものになるだろう。

自分事として捉える工夫

新得町立富村牛小中学校 教諭 山下 哲平



小学校3学年

小学校5学年

中学校1学年

POINT 2
思・判・表

CAN-DO リストを活用した領域統合型の言語活動の設定

1 CAN-DO リストの運用

子どもにとって更により言語活動にするためには、5領域の到達目標を示したCAN-DOリストを最大限に活用し、効果的な学びの場を設定することが大切だと考える。

2 子どもと家庭と教師を繋ぐCAN-DO リスト

CAN-DO リストを用いることで子どもは英語で「何ができるようになったか」を明確にすることができる。実際に運用するにあたっては、子どもと教師がその内容を日常的に共有できる仕組みが必要だと考える。

例えば、授業の自己評価シートにCAN-DOリストの項目を記載し、終末に振り返りを記入する活動は非常に効果的であると考える。毎時間、リストと照らし合わせながら評価することで、今何ができるようになっているのか、今後どのようなことができるようになるか具体的に考えることができるだろう。

また、シートを保護者と共有することで、子どもの学習状況が一目で伝わり、家庭学習の取り組み方について親子で話し合うきっかけにもなるだろう。外国語の授業でどのような英語表現を使い学習しているか理解してもらうことにもなると考えられる。

8/24	理想の1日を発表するために必要な言葉は、何んたる。	「とれんし」を使って、理想の1日を発表する事ができた。 理想の1日の時間を言う事ができた。
------	---------------------------	--

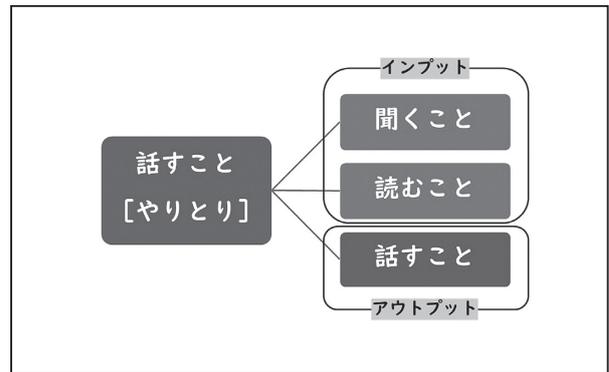
【実際の振り返りシートのCAN-DOリスト記載部分】

3 領域統合型の言語活動

学習指導要領において、「領域統合型の言語活動」が単元づくりを行う上での重要なポイントとしてあげられている。実際に、コミュニケーションは1つの領域を別々に行うのではなく、

インプットとアウトプットに分類された複数の領域を関連させながら行っている。例えば、左ページで紹介したレストランメニューの実践で、友達が考えたオリジナルメニューの発表を聞き（聞くこと）、それに対して質問を考え、尋ねる（話すこと）ような活動はこれにあたる。

同様にオリジナルメニューの発表をメモを取りながら聞き、自分の考えや感想、理由やその賛否などを記述する活動となれば、「聞くこと」と「書くこと」の領域統合と考えられるだろう。



【領域統合型のイメージ図】

単元の中に領域統合型の言語活動をどう配置するかを考える際にも、それぞれの領域のつながりが簡単に見て取れるCAN-DOリストの活用が効果的である。

単元を計画する際に、CAN-DOリストと照らし合わせながら、領域をどう統合させるかを考えることで子どもたちの言語活動に幅が生まれる。さらに、年間を通してどのように領域を統合させるかを考えることで深みもでてくることだろう。

本当に伝えたい内容を表現するための領域統合型の言語活動を通して、子どもたちは思考力、判断力、表現力等を高めていくことができるだろう。